

## 第二章 女三の宮の物語 女三の宮の出家

[第一段 朱雀院、夜闇に六条院へ参上]

山の帝は(御寺で修行生活なさる朱雀院は)、めづらしき御こと平かなりと聞こし召して(お目出度い宮の御出産が無事に済んだとお聞きあそばして)、あはれにゆかしう思ほすに(宮が愛らしく会いたいとお思いになるが)、

「かく悩みたまふよしのみあれば(このように産後の肥立ちが悪くいらっしゃるばかりとあつては)、いかにもものしたまふべきにか(とても此方にお越しにはなれないようだ)」

と、御行なひも乱れて思しけり(と御勤行も集中出来なくおなりでした)。

さばかり弱りたまへる人の(こうして弱りなさっている姫宮は)、ものを聞こし召さで(食事も召し上がらずに)、日ごろ経たまへば(何日も過ごしていらっしゃるので)、いと頼もしげなくなりたまひて(とても心細い気持にお成りで)、

「\*年ごろ見たてまつらざりしほどよりも(何年もお会い申さなかった時よりも、昨年末の五十賀でお会い申し上げて以来)、院のいと恋しく\*おぼえたまふを(父院が一層恋しく思われ申しますものを)、またも見たてまつらずなりぬるにや(再びはお会え申せず終いになるのでしょうか)」  
\*「年ごろ見たてまつらざりしほどよりも」は注に<『集成』は「宮は源氏に嫁して七年、父院との対面がなかったが、昨年暮れの御賀でお会いして、恋しさがかえってつものという気持」と注す。>とある。従って、左様に丸々補語する。 \*「おぼえたまふ」の「たまふ」は会話だけに使われる謙譲の補助動詞、なのだろう。

と、いたう泣いたまふ(と非常にお泣きなさいます)。

かく聞こえたまふさま(宮がこのように寂しさを訴え申しなさっている事を)、\*さるべき人して伝へ奏せさせたまひければ(殿が適任の親しい者を使者に立てて朱雀院にお知らせ申しなさったので)、いと堪へがたう悲しと思して(朱雀院はとても我慢できずに宮が可愛く思えなさって)、あるまじきこととは思し召しながら(入山の身での世俗入りは憚られる事とはお知りになりながらも)、夜に隠れて出でさせたまへり(夜に隠れて六条院にお越しあそばしたのです)。 \*「さるべき人」とは誰なのか。是は文遣いというよりは当事者本人に会って話をする使者のようで、それなりに微妙な話が分かる者となると、当然に身分は相当に高く、かつ殿にも宮にも朱雀院にも近しく、密通は別として、それぞれの立場を良く理解していて、実情を双方に説明できる人物なので、そうざらには居なさそう。具体的に誰とは分からないが、王族筋の乳母あたりかと思われる。こういう重要人物を簡単に伏せられると、当時の詳しい貴族生活事情など丸で知らない私は、とても大きな意味を見逃しそうで非常に不満だ。

かねてさる御消息もなく(予め御来意のお知らせもなく)、にはかにかく渡りおはしまいたれば(急にこのようにお見えあそばしたので)、主人の院(あるじのゐん、六条院源氏殿は)、おどろきかしこまりきこえたまふ(驚き威儀を正し申し上げなさいます)。

「世の中を顧みすまじう思ひはべりしかど(世俗の事を顧みずにいようと思っておりましたが)、なほ惑ひ覚めがたきものは(それでも迷いが消えないものは)、\*子の道の闇になむはべりければ(子を思う親心というものでございまして)、行なひも\*懈怠して(勤行にも身が入らず)、もし\*後れ先立つ道の道理のままならで別れなば(もし親が先に死ぬ自然の道理と違って子に先立たれたなら)、やがてこの恨みもや\*かたみに残らむと(必ず互いに心残りになるだろうと)、あぢきなさに(その理不尽さゆえに)、この世のそしりをば知らで(修行が足りないとの世間の非難も省みず)、かくものしはべる(こうして出てきました)」 \*「子の道の闇」は注に<大島本、朱合点。『異本紫明抄』は「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな」(後撰集雑一、一一〇二、兼輔朝臣)を指摘し、現行の注釈書でも指摘する。>とある。 \*「懈怠(けたい)」は<仏語。善行を修めるのに積極的でない心の状態。精進(しょうじん)に対していう。>と大辞泉にある。 \*「おくれさきだつ」は注に<『異本紫明抄』は「末の露もとの雫や世の中の後れ先立つためしなるらむ」(古今六帖、露・和漢朗詠集、無常、良僧正)を指摘。>とある。「すゑのつゆ」は<葉先の露>とのこと。 \*「かたみに」は、宮が心細がっていると聞いて朱雀院が六条院を訪ねたのだから、「片身に(一方だけに)」ではなく「互に(双方が交互に)」なのだろう。

と聞こえたまふ(と申しなさいます)。御容貌(お顔は)、異にても(剃髪の異相だが)、なまめかしうなつかしきさまに(優雅さもそのままに)、うち忍びやつれたまひて(質素な衣服を召されて)、うるはしき御法服ならず(荘厳な御法衣ではなく)、墨染の御姿(墨染め喪服の御姿が)、あらまほしうきよなるも(出家者らしくさっぱりしているのを)、うらやましく見たてまつりたまふ(出家願望のある源氏殿は羨ましく拝し申しなさいます)。\*例の(殿は旧交に思わず)、まづ涙落としたまふ(先ず涙を落としたまひます)。 \*「例の」は<例によって、いつものように>という言い方に見えるが、だとすると余りにもこの場にそぐわない表現に感じる。出家者が雑事に交じるのは普通ではなく、いつものことではない、のではないのか。実際、何でこんな言い方をするのか、奇妙に思う。ただ、「いつものように」を<源氏殿の日々の暮らしのままに>と考えれば、このところの雑念に追われる毎日のうっ積に、万感胸に迫って、という意味になるのかとも思うが、それはむしろ事情を汲んだ解釈で、「例の」という語に其処までの意味を込めるにはそれなりの構文が必要で、これだけでは唐突だ。だから多分、いろいろな事情はさて置き、昔ながらの<旧交に思わず>という意味なのだろう、と取って置く。

「患ひたまふ御さま(宮の御容態は)、ことなる御悩みにもはべらず(特別な御病気ではございません)。ただ月ごろ弱りたまへる御ありさまに(ただこの数ヶ月御出産で弱りなさっている御体に)、はかばかしう物なども参らぬ積もりにや(ほとんど物を召し上がらないことが積もったものか)、かくものしたまふにこそ(このようになっていらっしゃいます)」

など聞こえたまふ(などを申しなさいます)。

[第二段 朱雀院、女三の宮の希望を入れる]

「\*かたはらいたき御座なれども(簡単で恐縮な御座ですが)」 \*「かたはらいたし」は「傍ら痛し」で<傍目に見映えがしない、きまりが悪い、恥ずかしい>という意味らしく、今で言う「つまらないものですが」みたいな言い方だろうか。この「つまらないもの」は<大したことも出来なくて心苦しい>という意味だから、同じ自虐的な謙遜の言い回しだと思うが、私には「かたはらいたい」は<みっともない>という客観評価の語感が強いので、

この言い方だとくみともないものですが>に聞こえて謙遜語に思えない。語感よりは語意を取る。「御座」は「おまし」と読みがある。

とて(と言って殿は)、御帳の前に(宮の御帳台の前に)、御茵参りて(おんしとねまみりて、御座布団をご用意申し上げて)入れたてまつりたまふ(朱雀院にお部屋にお入り頂き申し上げなさいます)。宮をも(姫宮については)、とかう人びと繕ひきこえて(あれこれと女房たちが身なりを御整え申し上げて)、\*床のしもに下ろしたてまつる(御帳台の浜床に下ろし申し上げます)。\*「ゆかのしも」は注に<御帳台の下の浜床に。>とある。「浜床」は母屋の板敷きに台を置いた、その上の畳敷き、とのこと。「床のしも」という言い方は、普段ならその浜床にもう一段の御座を敷くところを、朱雀院に遠慮して浜床に直に座した、ということかも知れない。

御几帳すこし押しやらせたまひて(父院は宮との間の御几帳を少し横に押し遣りあそばして)、

「\*夜居加持僧などの心地すれど(夜居僧のような気分だが)、まだ\*験つくばかりの行なひにもあらねば(まだ神通力が備わるほどの修行を積んではいけないので)、かたはらいたけれど(このように側居するのは、恐縮だが)、ただおぼつかなくおぼえたまふらむさまを(ただあなたが会いたいと御思いの姿を)、さながら見たまふ\*べきなり(そのまま見て頂きたいだけなのです)」 \*「夜居加持僧(よみかぢそう)」は貴人に付き添って寝ずに祈祷を上げる僧、とのことで、冷泉帝が出生の秘密を夜居の僧都から聞き知った薄雲卷四章の重苦しい展開は印象深い。 \*「験つく(げんつく)」は<靈験が備わる>。仏道で言うのも変だが<神通力>だろう。 \*「べきなり」の「べし」は相当する、妥当だ、の意で、「なり」は説明語調。相当意を説明するということは、それが自分の来意目的であり、意志願望の主張だと示すことだ。

とて、御目おし拭はせたまふ(と目頭を押さえあそばします)。

宮も、いと弱げに泣いたまひて(宮もとても弱弱しくお泣きなさって)、

「\*生くべうもおぼえはべらぬを(生き永らえる気が致しませんので)、かくおはしまいたるついでに(折角に入道の院がお見えになったこの機会に)、\*尼になさせたまひてよ(出家儀式を執り行って、私を尼にして下さい、ぜひ)」 \*「生くべうも」の「べう(びょう)」は「べし」の連用形「べく」のウ音便。この「べし」は可能の意。 \*「尼になさせたまひてよ」は「尼になさせたまへ」+「てよ」で、「てよ」は今でも依頼語だが、この場面での語用には切実さが感じられる。初めて宮の存在感が伝わる場面かも知れない。

と聞こえたまふ(と申しなさいます)。

「さる御本意あらば(そうした出家のお覚悟があるなら)、いと尊きことなるを(それはとても尊重すべきお考えだが)、さすがに(そうは言っても)、限らぬ命のほどにて(寿命は天命で分からないものだから)、行く末遠き人は(長生きをしたら)、かへりてことの乱れあり(かえって迷いが生じて精進が乱れ)、世の人に誹らるるやうありぬべき(世間から非難されることにも成り予ねない)」

などのたまはせて(などと朱雀院は仰って)、大殿の君に(おとどのきみに、六条院源氏殿に)、

「かくなむ進みのたまふを(このように自分から進んで言い出しなざるのを)、今は限りのさまならば(これが最期となるなら)、片時のほどにても(僅かな間でも)、その助けあるべきさまにてとなむ(出家させて功德を積ませて来世に救いが在るようにさせてやりたいと)、思ひたまふる(存じます)」

とのたまへば(と仰るので)、

「日ごろもかくなむのたまへど(宮は此の頃はそのように良く仰いますが)、邪気などの(じゃけなどの、物の怪などが)、人の心たぶろかして(人の心を惑わせて)、かかる方にて進むるやうもはべなるをとて(そんな風にことを進めていることもあるからと)、聞きも入れはべらぬなり(聞き入れずに参っております)」

と聞こえたまふ(と殿はお応え申しなさいます)。

「もののけの教へにても(物の怪の指し示すところであっても)、それに負けぬとて(それに負けてしまったということ)、悪しかるべきことならばこそ憚らめ(悪くなることなら慎むべきだが)、弱りにたる人の(衰弱した人が)、限りとてものしたまはむことを(最後の願いと申しなさっていることを)、聞き過ぐさむは(聞き過ぎしてしまうのは)、後の悔い心苦しうや(後悔する気がする)」

とのたまふ(と朱雀院は仰います)。

[第三段 源氏、女三の宮の出家に狼狽]

御心の内(朱雀院は御内心で)、限りなううしろやすく譲りおきし御ことを(この上なく安心に思って源氏殿に譲り置いた姫宮の御世話を)、受けとりたまひて(殿は引き受けなさり)、さしも心ざし深からず(然程は愛情深からず)、わが思ふやうにはあらぬ御けしきを(院の思っていたのとは違う御様子を)、ことに触れつつ(知らせを受けるたびに)、年ごろ聞こし召し思しつめけること(数年来お聞きあそばして思い積もりなされた不満を)、色に出でて恨みきこえたまふべきにもあらねば(面と向かって殿に申し上げなされて解決することでも無いので)、世の人の思ひ言ふらむところも口惜しう思しわたるに(世間の人々が姫を軽んじるような悪口を思い言っているらしいのにも何も仰らず悔しく思い続けていらっしやっただ)、

「\*かかる折に(産後の不調のままに世を嘆き、こういう時に決意したという形で)、もて離れなむも(出家して離縁するのも)、何かは(特に如何と)、人笑へに(世間に笑われるような)、\*世を恨みたるけしきならで(夫婦仲の疎遠を嘆いてのものという形にならずに)、\*さもあらざらむ(済むのではないか)。 \*「かかる折に」は注に<『完訳』は「どうせ離れるのなら、重病の現在出家するのが最良、の気持」と注す。>とある。また、注には「人笑へに」の解釈として<『完訳』は「健康の身で出家しては、世間の物笑いにもなり、源氏を恨んで行為ともみられようが、の気持」と注す。>ともある。夫婦仲の悪さも然り乍ら、子を儲けたばかりで、その子が元服するなり、何か将来が定まった時、というのなら、功德を積むべく出家するのも、当時の世相では説得力があったのかもしれないが、この出産直後という時点では、重病だからという理由でも、出家がそう容易に世間に受け入れられるようにも思えない。むしろ、産後の不調を嘆いて、自分よりも子

孫の繁栄を願って、それを仏の慈悲にすぎるとしかなく、と本人が強く望んだ、という言い方しかなく気がする。つまり、事実は逆だが、話の筋としては、宮はもともと仏心が厚く出家願望があったのであり、重篤は出家の理由ではなく、出家を実行する際の説得力ある事情として説明される、という形だろう。大筋は掴みやすいが、いざ詰めるとなると、なかなか難しい事情だ。 \*「世を恨み」は<夫婦仲の疎遠を嘆く>。 \*「さもあらざらむ」は「何かは」を受けて<特にそれほどのことにはならないだろう>という言い方。

おほかたの後見には(子を儲けた以上は、その母子の全般的な財務援助は)、なほ頼まれぬべき御おきてなるを(宮が出家してもなお源氏殿が頼りにされるべき御関係なので)、ただ預けおきたてまつりしるしには思ひなして(六条院源氏殿はただ宮を一時的にお預け申し上げたところと思うことにして)、憎げに背くさまにはあらずとも(厭で別れた形ではなく)、\*御処分に広くおもしろき宮賜はりたまへるを(財産分与として広くて風情ある邸を宮は賜わっていらっしゃるので)、繕ひて住ませたてまつらむ(其処を修理してお住み頂こう)。 \*「御処分(ごそうぶん)」は<貴人の遺産分与>らしい。「宮賜はりたまへる」は<姫宮が宮邸を賜わりなされた>ということだろうから、授けたのは朱雀院で、出家に際しての財産分与かと考えてみるが、であれば「宮賜はりたまへる」ではなく<奉り給へし>とか言いそうだ。で、考えたが、宮邸は朱雀院の財産だったのだろうか、出家に際して時の皇太子、今の帝に預けたのではないだろうか。そして、二年前の秋あたりだろうか、若菜下巻三章一段に「姫宮の御ことをのみぞ、なほえ思ひ放たで、この院をば、なほおほかたの御後見に思ひきこえたまひて、うちうちの御心寄せあるべく奏せさせたまふ。二品になりたまひて、御封などまさる。いよいよはなやかに御勢ひ添ふ」と、朱雀院が姫宮を案じて六条院源氏殿への牽制もあって、帝に宮の厚遇を依頼したようなので、その際に帝から財産分配として宮に宮邸が下げ渡された、というのはどうだろう。

\*わがおはします世に(私は、姫のご存命中に)、さる方にてても(そういう形にしてでも)、うしろめたからず聞きおき(心配の無いように承知して)、またかの大殿も(またかのおとども、また源氏殿に於いても)、さいふとも(離縁となっても)、いとおろかにはよも思ひ放ちたまはじ(御子の母宮であってみれば、決して粗略にはお見捨てなされるまい)、その心ばへをも見果てむ(その考え方も見届けたい)」 \*「わがおはします世に」は注に<『集成』は「おはします」は、筆者の朱雀院に対する敬意が文面に現れたもの>と注す。>とある。と言っても、やはり変な印象なので写本画像サイトを調べる。と、国立博物館本では「~寿ま勢立てまつらむ 我をハしま寿よ寺に沙るかたにて うし××たから寿き、をき 又この井と、も さいふらむいとを×ろかにハよもおもひはなちたまはし~」(23-24/67)、京都大学本は「~すませたてまつらん 我於はしま須 よに沙るかたにてても うしろめたから須き、をき またかのおと、もさいふともいとおろかにハよも思はなち給ハシ そ乃心はへをもみはてん~」(p. 039)、くらいに見える。とても私には読み下せない。それでも私なりに納得したいので、この時代にこういう語法があったのかどうかは分からないが、「我おはします世に」が本文だとして、それを「我、おはします世に」と校訂して、意志の強調として「我(われ、私は)」の主語を明示した言い方、と読んでみたい。「おはします世に」は<姫のご存命中に>だ。

と思ほし取りて(と考えをまとめなされて)、

「さらば(それでは)、かくものしたるついでに(このような次第になった機会に)、忌むこと受けたまはむをだに(宮が出家の戒めをお受けなされるために)、結縁にせむかし(私とその仏縁を取り結ぶことにしよう)」

とのたまはず(と仰せになります)。

大殿の君(おとどのきみ、夫の源氏殿は)、\*憂しと思す方も忘れて(遺憾にお思いなさる宮の密通のことも忘れて)、こはいかなるべきことぞと(是は何としたことかと)、悲しく口惜しければ(悲しく残念で)、え堪へたまはず(我慢できずに)、内に入りて(御帳台にお入りになって)、 \*「憂しと思す方」は注に<柏木と女三の宮の密通事件をさす。かつて六条御息所の生霊事件も源氏にとって「憂し」とあった。>とある。

「などか(どうして)、いくばくもはべるまじき身をふり捨てて(残る寿命がいくばくもない私を見捨てて)、かうは思しなりにける(こうして出家をお決めなさったのですか)。なほ(まだ)、しばし心を静めたまひて(もう少し気持を落ち着けなさって)、御湯参り(御薬湯をお呑みになり)、物などをも聞こし召せ(食事も御取りください)。尊きことなりとも(出家なさって仏道勤行に励むのは、尊いことですが)、御身弱うては(お体が弱くては)、行なひもしたまひてむや(念仏行も出来なさいませんでしょう)。かつは(いづれにしても)、つくろひたまひてこそ(養生なさってからになされませ)」

と聞こえたまへど(と申しなさるが)、頭ふりて(かしらふりて、宮は頭を横に振って)、いとつらうのたまふと思したり(とても辛いことを仰るとお思いになりました)。つれなくて(つれなく応対申して)、恨めしと思すこともありけるにやと見たてまつりたまふに(情けなくお思いになったこともあるだろうと殿は宮を押し申しなさって)、いとほしうあはれなり(若い身空での出家に愛しさが募り感傷に耽ります)。とかく聞こえ返さひ(殿がとかく反対を申して)、思しやすらふほどに(宮がためらっていらっしゃる内に)、夜明け方になりぬ(夜明け近くになりました)。

#### [第四段 朱雀院、夜明け方に山へ帰る]

帰り入らむに(御寺に帰って入山するのに)、道も昼ははしたなかるべしと急がせたまひて(道中が昼では人目について見苦しくなるだろうと朱雀院は宮の出家式をお急ぎあそばして)、御祈りにさぶらふ中に(平癒祈願に伺候している僧の中から)、やむごとなう尊き限り召し入れて(立派な高僧だけを呼び寄せて)、御髪下ろさせたまふ(断髪式を行ないなさいます)。いと盛りにきよらなる御髪を削ぎ捨てて(若い盛りに美しい御髪を削ぎ捨てて)、忌むこと受けたまふ作法(世俗を絶つ戒めを受けなさる一連の様式が)、悲しう口惜しければ(悲しく残念なので)、大殿はえ忍びあへたまはず(源氏殿はとても抑え切れず)、いみじう泣いたまふ(大泣きなさいます)。

院はた(院はまた)、もとより取り分きてやむごとなう(もとより取り分け格別に)、人よりもすぐれて見たてまつらむと思ししを(この宮を他の誰よりも幸せになって頂きたいと御思いだったものを)、この世には甲斐なきやうにないたてまつるも(現世ではそれが適わないように為し申し上げるのも)、飽かず悲しければ(止め処なく悲しいので)、うちしほたれたまふ(力なく涙ぐみなさいます)。

「かくても、平かにて(こうして無事に仏門入りした以上は)、\*同じうは念誦をも勤めたまへ(出来るだけ念仏行に努めなさい)」 \*「同じうは」は与謝野訳文に<できれば>とあって、是に従う。「同じうは」の字面は<同じことなら、どうせなら>だが、問題は何が<同じ>なのかだ。場面から考えれば、病床での結縁

儀式なのだから、この「同じ」は<体調が同じ=病状が回復しない>という意味であり、それでも仏門入りした以上は<出来れば修行を勤めなさい>という文意になる。注には<出家姿でいるなら、何もせずにいるのではなく、の気持。『完訳』は「出家したうへは来世の救済に期待して精進しなさい」と訳す。>とあるが、是は多分に読者の興味本位の読み方だ。読者としては、この宮の出家は、宮自身は密通の罪の意識に耐えかねてであり、朱雀院は夫婦仲の悪さ、取り分け紫の上に宮が遅れを取っていることを憐れんでのようだが、形としては源氏殿との離縁が共通目的だ、という事情を知らされている。だから、確かに、宿縁の幸いを仏の慈悲に乞う、という出家本来の願いはあるのだろうが、当面の事情としては源氏殿との離婚が具体的に必要な処置で、出家はその方便という図式にも見える。だから「同じうは」が、それが本来の目的ではないが<どうせ出家してしまったのなら>という言い方のようにも見えてしまう。しかし「出家」は今後の暮らしが仏式の規律に従って修行生活を送ることになる、という重要な選択であって、その決定の背景にさまざまな事情があるのは当然で、だからこそ、此处でそれまでの生活を絶つ、という生き方になるのだから、それ自体が主題であって、思い付きや方便で済むものではない、筈だ。だから、この「同じうは」は<思うように回復しなくても、出来るだけ>と読むのが正しい、と私は思う。が、読者の勘違いは作者の折込済みでもある気はする。というか、建前としては<人生の選択>というべき「出家」も、実際は思い付きや方便ですることが多いし、それが本質かも知れない、くらいの語り口にすら思える。「平かにて」も引っ掛けた言い方だろう。言葉に含みを持たせるのは、利口そうに見せようとする職業文人の悪癖、または生活の知恵だ。

と聞こえ置きたまひて(と申し置きなさって)、明け果てぬるに(夜が明けてしまうので)、急ぎで出でさせたまひぬ(急いでお帰りあそばしました)。

宮は、なほ弱う消え入るやうにしたまひて(宮は変わらず弱弱しく息も絶えそうにしていらっしゃって)、はかばかしうもえ見たてまつらず(しっかりと父院をお見送り申し上げ為されず)、ものなども聞こえたまはず(お別れのご挨拶も申し上げなさいません)。

大殿も(おとども、源氏殿も)、

「夢のやうに思ひたまへ乱るる心惑ひに(俄かの宮の御出家が、夢のように思われまして乱れる心の動揺で)、かう\*昔おぼえたる御幸の\*かしこまりをも(かつて昔にありました院の御来訪の時のお持て成しを)、え御覧ぜられぬ\*らうがはしきは(御覧頂けない無作法は)、ことさらに参りはべりてなむ(こと改めて私がそちらへ伺って、お詫び申し上げます)」 \*「昔おぼえたる御幸」は<九年前の六条院行幸をさす。「藤裏葉」巻に語られていた。>と注にある。 \*「かしこまり」は注に<『集成』は「恐懼の気持。具体的には、饗応、贈り物その他のしかるべきもてなしをいう」と注す。>とある。 \*「らうがはしき」は<乱雑さ、不始末、無作法>。

と聞こえたまふ(と申し上げなさいます)。御送りに人びと参らせたまふ(院のお見送りに従者を付き従えさせなさいます)。

「世の中の、今日か明日かにおぼえはべりしほどに(世の中が今日か明日に終わるように自分の寿命が心細く思えた時に)、また知る人もなくて(他に頼る人も無くて)、漂はむことの(私に先立たれて身寄りを失くした宮が、世間に漂う事が)、あはれに避りがたうおぼえはべしかば(不憫にも避け難く思えまして)、御本意にはあらざりけめど(あなたの御本意ではなかったでしょうが)、かく聞こえつけて(このように華やかな六条院暮らしの御世話をお願い申し上げて)、年ご

ろは心やすく思ひたまへつるを(この数年来は安心に思っただけにまいりましたので)、もしも生きとまりはべらば(もしも宮がこの出家に拠って生き永らえることが出来たなら)、さま異に変わりて(尼姿で)、人しげき住まひはつきなかるべきを(人が多く居る暮らしは似合わないだろうし)、さるべき山里などに向け離れたらむありさまも(修行に相応しい山里などに籠もりなざる生活も)、またさすがに心細かるべくや(それはまたそれで心細いかと、案じられます)。さまに従ひて(様子に応じて)、なほ(今後も)、思し放つまじく(よろしくお取り計らい下さい)」

など聞こえたまへば(などと院が申しなさると)、

「さらにかくまで仰せらるるなむ(重ねて其処までご丁寧な御配慮を仰せられますと)、かへりて恥づかしう思ひたまへらるる(却って恐縮に存じられます)。乱り心地(動揺が)、とかく乱れはべりて(一向に収まりませんので)、何事もえわきまへはべらず(何ともまとまったお返事も御用意出来ません)」

とて(と言って)、げに(殿は実に)、いと堪へがたげに思したり(とても宮の御出家を受け止め難く御思いでした)。

\*後夜の御加持に(夜明け前の除霊祈祷で)、御もののけ出で来て(宮の体内から物の怪が姿を現して)、 \*「後夜(ごや)」は<六時の一。寅(とら)の刻。夜半から夜明け前のころ。現在の午前4時ごろ。また、その時に行う勤行(ごんぎょう)。夜明け前の勤行。>と大辞泉にある。ということは、朱雀院は夜が白む前に慌しく帰山し、その直後の祈祷で物の怪が宮の体内から姿を現した、という運びだろうか。

「かうぞあるよ(こういうことに成った訳だ)。いとかしこう取り返しつと(実に上手く取り返ししたものと)、\*一人をば思したりしが(紫の上一人の生還を喜びなされたのが)、いとねたかりしかば(とても憎らしくて)、このわたりに(この宮に)、さりげなくてなむ(目立たないように)、日ごろさぶらひつる(最近は取り付いていたのだ)。\*今は帰るなむ(用が済んだので、もう帰ることにする)」 \*「一人をば思したりし」は注に<「一人」は紫の上をさし、「思す」の主語は源氏。>とある。物の怪の正体が故六条御息所の死霊だと明かされる台詞だ。 \*「今は帰るなむ」は印象深い。この理屈っぽい作者は実にあっさりとして、物の怪を殿の深層心理の産物として描いており、この「用が済んだから消える」と物の怪に言わせる設定は、つくづく源氏殿の御都合主義を思わせる語り口だ。この御息所コンプレックスは、若き日の光君が相当に衝撃的な印象を受けたらしい性戯や秘儀と、それを彩る複雑な風情とが相俟って形成された価値観であるらしい王朝文化への憧れに関連してはいるのだろうが、社会的責任などというものは、その立場や情勢次第で中身がころころ変わるもののように、都合の悪い事の全部を怨霊の仕業にすることほど自己正当化に都合の良い考え方はない。世の中はいろいろあって大変だけど、男の考えることはこんなもの、と高を括っている作者の実感が伝わるようだ。ただ、まあ、それくらい押しの強い男が居ないと世の中は動かない、みたいなことも分かっている、この物語を綴っているんだろうな。それが次の一行だ。

とて、うち笑ふ(と言ってしたり顔で笑います)。

いとあさましう(全く驚きで)、



「さは(それでは)、このもののけのここにも(あの紫の上に取り付いた物の怪がこの宮にも)、離れざりけるにやあらむ(取り付いていたということか)」

と思すに(とお思いになって)、いとほしう悔しう思さる(殿はつくづく六条御息所の怨念を情けなく残念にお思いになりました)。

宮、すこし生き出でたまふやうなれど(宮は少し生き返りなさったようだが)、なほ頼みがたげに見えたまふ(まだ頼りなさそうに見えなさいます)。さぶらふ人びとも(側仕えする女房たちも)、いといふかひなうおぼゆれど(宮の御出家はとても残念に思えたが)、「かうても、平かにだにおはしまさば(ともかく体調が回復なされば)」と、\*念じつつ(と祈りながら、見守り申す他はありません。)、御修法また延べて(宮の平癒祈願はさらに続いて)、たゆみなく行なはせなど(休みなく行なわせるなど)、よろづにせさせたまふ(殿はいろいろと手を尽くさせなさいます)。 \*「念じつつ」は読点で下に続く渋谷校訂になっているが、此処は言い切りの句点として読みたい。「つつ」は反復動作を示す接続助詞ということらしく、言い切りでは<それをし続ける他は無い=それしかない>という強調文になる、かと思う。